

## 「食」のプロジェクト

# 「追大ミツバチプロジェクト」2016年度の活動報告

所員 今 堀 洋 子  
(地域創造学部准教授)

地域文化創造機構に引き続き、北摂総合研究所からもご支援いただいている「追大ミツバチプロジェクト」ですが、3年目は、念願の採蜜ができたことにより、活動の幅がぐっと広がりました。2016年の春からどんな活動をしてきたのか、ここで振り返ってみたいと思います。

3年目の追大ミツバチプロジェクトは、大学の地元の安威在住で、週末養蜂をなさっている浅井さんにご指導、ご支援をいただきながら、浅井さんの巣箱二箱と共に共同飼育するというところでスタートしました。2年目の秋から冬にかけて、ミツバチの数を激減させてしまい、緊急処置として梅田ミツバチプロジェクトに里子に出し、ミツバチの数を増やしていただいた巣箱が戻ってきたのが4月14日でした。

プロジェクトの学生メンバーは総勢12名、うち1回生の2名は、プロジェクトは履修していないけれど、ミツバチへの関心が非常に高く、土日の活動にも、積極的に参加してくれました。ミツバチの活動が活発である時期は、毎週、巣箱の中身を点検する内検が必要になります。浅井さんとメンバーとで、毎週末に、内検をし、スズメバチ捕獲器の作成をすることで、しだいに作業に習熟していきました。

プロジェクト初の採蜜は、2016年6月4日の早朝に行いました。採蜜に必要な道具、蜜蓋をそぎ落としたための蜜刀、ハチミツを絞るための分離機などは、浅井さんのものを使わせていただきました。この日、20リットル程度のハチミツを採蜜することができました。

初採蜜をした6月4日は、大阪府と大阪市による共同開催の南港エコフェスタに追大ミツバチプロジェクトとして出展する日でもありました。プロジェクトの紹介と、ミツバチの紙芝居を披露するというに加えて、採れたてのハチミツを持参して、来場者に試食していただきました。プロジェクトメンバーにとって、自分達の活動を説明する際にも、ハチミツという具体的なモノがあることにより、聞き手の興味もまし、会話も弾み、プロジェクトの活動に手ごたえを感じることができたようです。南港エコフェスタに向けて、研究所のご厚意でプロジェクトのオリジナルTシャツを作成することができました。その後、Tシャツを着用する場面が何度もあり、Tシャツ自体も大活躍をしました。

今年度は、bioaの瀬口さんのコーディネートの元、安威小学校の5年生に、ミツバチをテーマとした環境教育の授業をする機会にも恵まれました。1度目は、5年生に追大に来てもらい、ミツバチについての話や紙芝居と共に、実際に養蜂の現場も見学してもらい、ミツバチ達の様子も見てもらいました。2度目は、安威小学校に出向き、1度目の授業の時に、5年生から出た疑問に答えるべく、プロジェクトメンバーがグループに分かれて、5つのテーマでプレゼンをしました。3度目は、「もし、ミツバチがいなくなったら？」というテーマで、グループに分かれて対話をしてもらう機会を持つと準備していましたが、残念ながら、スケジュールが合わず、実現できませんでした。

採蜜の話に戻りますが、2度目の採蜜は、7月31日に行いました。6月の蜜は春蜜として、7月の蜜は夏蜜として、安威という地域の春の味と夏の味が形になり、披露することができるようになったのだと改めて実感しました。ハチミツの商品名ですが、安威の地域にちなんで、「あいみつ」と名付けました。ハチミツを通じて、安威の地域を知っていただけたらいいなという想いも込めました。秋の「あいみつ」の本格的な披露に向けて、瓶詰、ラベル貼などの作業は、夏休みに入る直前にスタートさせました。また、保健所に、ハチミツを販売する許可についての確認をとる作業もこの時期にしました。ちなみに、伏見のミツバチ愛好家の田中正志さんに測っていただいたところ、春蜜が82.9、夏蜜が79.9と非常に高く、発酵することなく半永久的に保存できるレベルのものだということが判明しました。

お盆を過ぎる頃になると、ミツバチにとっての最大の天敵であるオオスズメバチがやってきます。夏休みの時

期ですが、10日に1回の頻度で、学生メンバー中心に内検を続けました。オオスズメバチと対峙するのは、非常にリスクが高く、五感をフル活動することが求められます。メンバーは、わからないことや疑問に思ったことは、その場でスマホを使って調べるなどしながら、ミツバチ達をオオスズメバチから守るべく、尽力しました。その様子を大学の広報が取材してくださり、追大ミツバチプロジェクトのPRビデオもできあがりしました。

夏休み明け直後には、茨木市都市政策課と北摂総合研究所の共同企画で、いばらきまちづくりラボ「ミツバチでまちづくり」という講座の第1回目が開講されました。ミツバチの養蜂に関心がある方、ハチミツに関心がある方など、20名を超える熱心な市民の方々が参加してくださいました。第1回目は、養蜂の現場を見ていただきました。養蜂をされたいという方々からは、具体的な質問が出されて、養蜂に関心が高まっていることを肌で感じました。「あいみつ」の試食もしていただきました。

9月18日には、大阪市環境局主催のエコ縁日というイベントに声がかかり、初めて「あいみつ」を販売する予定でしたが、生憎の天候で、イベントが延期になってしまい、「あいみつ」の販売はお預けとなりました。

そして、10月31日は、プロジェクトメンバーの学生8人と首相公邸を訪れ、安倍昭恵夫人に「あいみつ」をお届けし、ミツバチ談義をしてきました。昭恵夫人は、公邸で、ニホンミツバチの養蜂をされており、養蜂の現場も見せていただきました。公邸のニホンミツバチは、天敵のオオスズメバチもいないせいか、昭恵夫人の手のひらに乗ってもおとなしくしていました。昭恵夫人自身も、ミツバチを通じて、様々な地域の活動をつなげておられました。平和活動にも熱心な昭恵夫人は、何かに対して、賛成・反対と分断してしまうのではなく、共にそれを乗り越えていける道を模索しており、私はその姿勢に共感しました。そして、それぞれが立場を超えて、手を取り合って進んでいこうという時に、その中心にあるものとして「ミツバチ」や「ハチミツ」に可能性や魅力を感じている点も共通だと感じました。そして、ぜひ、平和の祭典としてのハチミツサミットを開催しましょうと盛り上がりました。

翌11月1日、東京に残ったメンバー4名と共に、玉川大学のミツバチ科学研究センターを訪問しました。ミツバチ科学研究センターは、1950年からミツバチの研究をされているのですが、最近のセンターの活動について中村純先生がお話をしてくださり、養蜂の現場も見せてくださいました。中村教授が、時代の変化に伴い、ミツバチを社会科学的に研究する人材が足りていないとおっしゃっており、追大ミツバチプロジェクトの方向性の一つの可能性を示していただきました。追大ミツバチプロジェクトで経験を重ねた学生が、玉川大学のミツバチ科学研究センターで研究を続けるというような日が来たら良いと妄想しました。

11月5日、6日の学園祭、将軍山祭で、初めて「あいみつ」の販売をしました。プロジェクトメンバーのご親族の方々の予約注文もたくさん入っていたこともあり、予定していた200個は、あっという間に完売してしまいました。2日目は、おひとり様2つまでという限定販売でした。世界中でミツバチの数が激減しておりミツバチに対する関心が高まっていることに加えて、混じりけなしの天然ハチミツの希少性があがってきており、その割には、100ml 500円と、値段が安いこともあり、あっという間に売れてしまったようです。プロジェクトの性格上、商売でやっているわけではないですし、手広くやれるわけでもないのに、「あいみつ」は、販売するというよりは、別の形、例えば、ギフトとしてお渡ししていくというような形を考えていきたいと思っています。

そんな想いが通じたのか、サンケイリビングのリビング新聞の創刊45周年記念チャリティー企画「リビング北摂45th ほくほく袋」の候補として声がかかり、春蜜と夏蜜のセットで20組の「あいみつ」をギフトとして提供させていただきました。リビング新聞に掲載されると、読者からの「あいみつ」の関心が高く、どこで購入できるのか?といった問い合わせが多数寄せられたようです。企画された編集者の方からは、「『学生がこんな取り組みをしているんだ!』というポイントに驚き、注目されていました。」というコメントもいただきました。

11月23日には、残り少なくなった「あいみつ」50個を持って、大阪市生涯学習センター主催の総合フェスタに出展しました。リビング新聞の読者も来てくださったようで、お一人さま限定1つにも関わらず、お昼前に完売してしまいました。当日は祝日でしたが、大学は授業があったこともあり、追大ミツバチプロジェクトの1期生の中村さん(社会人)と藤本さん(院生)に、手伝ってもらいました。彼女たちも、このような形で、プロジェクトに関われることを、とても喜んでくれました。

12月と1月には、いばらきまちづくりラボ「ミツバチでまちづくり」の2回目と3回目の講座が開催されました。2回目では、公邸訪問や、玉川大学訪問、学園祭でのあいみつ販売などを、学生メンバーが発表しました。

市民の方々は、それを熱心に聴いてくださいました。また、ミツバチを取り巻く環境について、映像も紹介しました。3回目は、ワークショップ形式で、ミツバチに限定せずに、参加した方々が、地域の人達とやってみたいことを挙げていただき、それについて、グループに分かれて、対話をしてもらいました。耕作放棄地で農作業をやりたい人、自作のミニ巣箱で養蜂をしたい人、街路樹として果樹を植えたい人、追大にミツバチプロジェクトに参加してみたい人などがおられ、それぞれ、活発な対話がされていました。

2月4日には、京都産業大学の高橋純一先生の第一回ミツバチ産業科学研究会で、メンバーの学生達がプロジェクトの活動報告をしました。イベントと違って、アカデミックな場所で、企業の方々や研究者に交じって発表をさせていただく機会も、貴重であったと思います。当初から、ニホンミツバチのことをご指導いただいている京都学園大学の坂本先生からも、学生達の発表に関して、お褒めの言葉をいただきました。昨年の冬に巣箱を里子に出した梅田ミツバチプロジェクトのメンバーの方々も来られており、お世話になった方々に我々の一年の活動の様子を知っていただく機会にもなりました。

春からの活動を振り返ってみて、たくさんの方々のご支援で、このプロジェクトが成り立っていたのだなという感謝の気持ちと共に、「ミツバチ」、「ハチミツ」のおかげで、たくさんつながりが自然発生的に生まれたのだと確信いたしました。色々な可能性を秘めている「ミツバチ」「ハチミツ」を、今後、どう展開していくのか、今までもそうであったように流れに任せながら、向き合っていきたいと思っています。このプロジェクトでお世話になった方々に感謝を申し上げますと共に、引き続きご支援の程、よろしく願い申し上げます。



週末の内検の様子



採蜜時蜜刀で蜜蓋をそく作業



南港フェスタで紙芝居上映中



安威小学校での授業風景



公邸の中庭で  
昭恵首相夫人と



学園祭での「あいみつ」お披露目



プロジェクト OG の中村さんと藤本さん